戦国おもしろ百話

～大河ドラマ『南海道の晴嵐』を期して（二八四）

三好・織田・豊臣・徳川時代に生きる横田内膳正村詮

――阿波岩倉・和泉岸和田・近江水口・駿河駿府・伯耆米子への変転（十二）

文・出水　康生

勝瑞城館跡まつり

昨年の第十五回に特別ゲストとして参加し、勝瑞三好城館の存在、その城館跡まつりを所在の一地域のものでなく近い将来に国の史跡公園に形成、公開されることを全国に発信。その主旨、盛況が『勝瑞城館跡まつり十五年のあゆみ』(編集委員会発刊小林和子委員長)に記載された。さて今年は?と思案しながら「義理と人情と痩せ我慢」を提唱した先人を偲びながら「緊急(SOS)のお願い」を発信して、ともかくも五月八日の五月晴れの好天(五月九日は大雨)の下で旗幟高らかに勝鬨を上げた。参加者は写真のように情誼に厚い各隊が「勝瑞武者行列の会」(吉田眞治会長)の呼びかけで一〇〇余人。三月二四日の三好長慶会の研究例会では結論を持ち越し、地元での盛上りの動向を注視、期待するとした。昨年に熱誠を吐露された濱眞吉町議の急逝(告別式・満中陰に出席)を思い遺徳を偲んだ。以前から要望していた石川智能藍住町長との面談が、町議選挙が済んだとして福永高治さん・松本初子さんの斡旋で四月七日に実現された。「決断」のリミット、「地元はやねこいな」の陰の声もあったが、町長との面談の日に「勝瑞武者行列の会」が誕生して一ヶ月後の五月八日に、同志との共々の協力がなされてメインの時間帯に盛大な武者行列、そのパフォーマンスが行われた。参加のそれぞれが同志として「俺・私がやったとは言わないが、俺・私が居らなんだら成功しとらんわな」とにこにこにやにやできる状況で終ることができて、来年を期するための問題点が明確とされた。

徳島新聞の「勝瑞城館跡まつり」の報道

「理世安民」「南海道の晴嵐」の旗幟高らかに
(写真は福永高治さん撮影)

勝瑞三好城館の最後の城主十河(三好)民部大輔存保の旗幟高らかに、前進!

100余人の勝瑞武者行列参加者、依代の赤大傘に思いを寄せる同志たち!

次代の若武者と両親、十河・新開隊と共に

"あんたが大将"しっかり

「やねこい」との阿波弁の独特の表現で評されながら一ヶ月で目にもの見せる武者行列の実現。十五年来の「誇るべき故郷の歴史の再認識」の提唱、第二二回国文祭(二〇〇七)への「優秀賞」での参加以来の秋田忠昭さん制作の甲冑・陣羽織・旗幟の蓄積、三好市三野町での「三好長慶武者行列まつり」の五年、戦国三好氏の後裔が島の人口の半分を占める伊吹島の三好兼光さんらの好意などなど。武者行列の出陣・前進に吹き鳴らされる法螺貝が「妖貝法螺吹き隊」(山口頼明隊長)の旗幟高らかにして吹奏される。三好の名を持って故郷を元気づける三好市・伊吹島よりの甲冑借用で地元勢に自覚を促し、深謀遠慮をもって支えながら成長を実現させる。武者行列の当日となって参加してくれた県教委の白井コウジ先生と剣道部の四宮ショウタ・西谷リョウスケ君。前日までピッカピカの一年生五人とされていたが、教師も甲冑を着けて先鋒、二人が副将・大将として地元を代表する者として大声での名乗り、一騎当千の存在となった。思い返せば、和田哲雄教育長が民間人校長として藍住東小学校長となった時に神戸大学の先輩・後輩の縁と六年生担任の友成幸恵さんが小生の教え子であった不思議な出会いで、勝瑞三好城館を教材とする総合学習が開始され、十三年の時の経過で第一回の松友美佐紀さんが本年のリオデジャネイロオリンピックのバドミントン競技女子ダブルスで高橋礼華さんと組んで「金メダル」が期待されている。金メダルを手にされて徳島に凱旋して祝賀会が開催されたら、和田・友成先生と共々に参加させてもらって第一回総合学習の時の感想文を持って「覚えとるか?」と言えたら教師冥利に尽きるものとして期して待つ「遊びごころと阿呆の介ぶり」。

ことほど左様に人と人との出会いの不思議、一期一会の出会いを大切にすべきことが、あんたが大将として共々に協力して実現させた第十六回勝瑞城館跡まつりへの参加で実感させてもらった。「お陰さまで」と合掌。この原稿を書く丁度一ヵ月前の四月

十四日二十一時二六分に熊本に大地震が発生したのであった。

近江水口・近江八幡の中村一氏

紀州の根来・雑賀攻め平定の直後、四国平定戦の直前の天正十三(一五八五)年五月八日に中村一氏が近江水口城主となり、四国平定・国分けがされた八月に蜂須賀家政が阿波国主となり、三好康長の養子となっていた三好孫七郎信吉が黒田官兵衛を参謀として三好康長・横田村詮の故城の岩倉城を「雀おどし戦法」の心理作戦で陥落させた。三好孫七郎信吉から豊臣秀次と名乗りを変えて四国攻めの功を豊臣秀吉が認めて頼るべき一族として近江八幡城主四三万石のうち二〇万石を秀次領とし、二三万石は宿老の中村一氏(水口)・堀尾吉晴(佐和山)・山内一豊(長浜)・一柳直末(大垣)の領分とし、田中吉政が秀次の筆頭宿老として八幡山城の築城と城下町形成・政治の中心となる。豊臣秀次が近江八幡城主であったのは天正十三(一五八五)年から十八年の五年間で清州城に移る。近江八幡山城は織田信長の安土山城と直近に位置する。秀次は安土城下の民衆を八幡山城下に移住させ、信長の楽市楽座令を継承して城下の繁栄を図り、近江商人の本拠の一となる近江八幡市の基盤を築く。ただ八幡山城の築城・城下町形成は豊臣秀吉の配慮の下で田中吉政を中心とする宿老たちの会議・協力によって行われたとされている。同時期に「天下様」となった豊臣秀吉が京の内野の空地に聚楽第を築き形成することを秀次に命じたことで、八幡山城築城、城下町形成には宿老たちの協力が推測される。近江八幡市の町名に大杉町の別名である久兵衛町が田中久兵衛吉政、仲屋町の別名である市助町が一柳市助直末、孫平次町が中村孫平次一氏の名にちなむものとされる。宿老がそれぞれの領民を徴発して労働させたり移住させたりの名残りである。八幡山城には本丸・北の丸・二の丸・秀次館や宿老屋敷が形成されたことが現存の石垣や科学的な発掘調査によって証明されている。ロープウェイ駅からの展望は城下の南北十二筋・東西五筋の基盤目状の古城下町の跡と拡大された街並と信長の安土山城・六角氏の観音山城の居城跡が一望される。

中村一氏の名は「孫平次町」の名で荘厳な雰囲気の豊臣秀次の息女玉姫を菩提する浄土宗洞覚院を起点とするように形成されている。中村一氏が豊臣秀次と共に京で活動することが強いられたであろうから、その代行として横田村詮が水口城築城、その城下町形成に活動したであろうが、その史料的な記録は「匂ひはすれども姿は見えぬ」存在である。

八幡山城下に荘厳な日牟札八幡宮の社殿があり、門前に街並が形成されている。八幡山城と城下を区切るように琵琶湖水運と連結する「八幡堀」が掘削されて楽市楽座による商業活動を支え、後の「天秤商い」の近江商人の本拠となった。その八幡堀が埋め立てられる危機を市民の活動で守られ、現在に重要伝統建築物群として存在している。ただその街並みに電柱・電線があって、なんで地下埋没をして、より良い街並とせんのか?と思わせた。

近江八幡山城とその城下町の形成に活動した宿老たちが時代の推移によって各地に移封された時に八幡山城下形成の技法が活用された。秀次直続の宿老とされた田中吉政が城主となった三河岡崎(愛知県岡崎市)や築後柳川(福岡県柳川市)の築城や町ずくりに活かされた。柳川城の内堀・外堀が水郷として現在に有名である根源は近江の八幡堀の技法によるとされる。中村一氏が関ヶ原合戦の直前に駿府城下の横田内膳屋敷で徳川家康と会見した後に病死して、その嫡子の中村忠一が伯耆米子十八万石に転封されて米子城・米子城下町を形成した時に日本海に続く水運を活用して城下の繁栄を図った米子城下町にもその技法が活用されたと言われる。その具現者は中村一氏の妹を正室とし、六〇〇〇石の筆頭家老となった横田内膳正村詮であったに違いない。豊臣秀吉が「天下様」として関白となった時には中村一氏が式部少輔に補任され、それと同時に横田村詮が内膳正に補任されたものであろう、とされる。

ことほど左様に、一期一会の出会いの不思議で清正(せいしょう)公様の熊本城の地震による大被害と今日まで二五〇〇回の大小地震、勝瑞三好城館跡での盛大な武者行列実行など忙中忙々の一ヵ月、元気が一番!

徳川氏と由縁の水口城

近江八幡城下の日牟礼八幡神社本殿

豊臣秀次の近江八幡城山上から安土城跡を眺む

近江八幡山城の石垣

近江八幡山城の二の丸跡案内

近江八幡市に残る中村一氏の街作りの「孫平次町」の町名